

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381018

研究課題名(和文) 学力として社会コンピテンシーを育成する授業診断シートとその活用法の開発

研究課題名(英文) On the Development of diagnosis criteria and the assessment sheet on social competency as a scholastic ability

研究代表者

原田 信之 (HARADA, Nobuyuki)

名古屋市立大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：20345771

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、学習効果を高めるグループ学習の活用と、学力として汎用的能力(社会コンピテンシー)を育成する協同学習の指導法の定着への貢献を基本的視座とした。第一に、ジョン・ハッティの「メタ・メタ分析」による協同学習の効果特定の方法とドイツにおけるその統合データに基づく評価、さらにはその統合データの手法そのものへの評価を突き止めた。第二に、協同学習の質評価のための授業診断シートの試行的類例を構築することができた。第三に、学力として社会コンピテンシーを育成するドイツの学力改革、その汎用的能力育成のための協同学習の機能や条件、指導と評価の一体化、診断指標・評価シートの開発に関し、総括的な研究を行なった。

研究成果の概要(英文)：This study assumed following two basic points to contribute, namely to bring up utilization of the group learning for the enhancement of learning effect and the establishment of the orientation method for the cooperative learning (CL) which as "ueberfachliche Kompetenz" (social competency) should be built up as scholastic ability. First, a method of the effect identification of the CL by John Hattie's "meta-meta-analysis" and the evaluation based on the identification data in Germany, furthermore the evaluation itself of the unification data have been clarified. Second, a trial for similar cases of the class diagnosis algorithm could be built for the evaluation of the quality of CL. Third, an all-inclusive study has been done, such as scholastic ability reform in Germany, the unification of a function and conditions, instruction and the evaluation of CL contributing to "ueberfachliche Kompetenz", the development of a diagnosis criteria and the assessment sheet.

研究分野：教育方法学

キーワード：協同学習 授業診断 社会コンピテンシー 教授学 グループ学習 ドイツ 協働学習 ジョン・ハッティ

### 1. 研究開始当初の背景

学校教育実践において、近年、アクティブラーニングの必要性が高まるとともに、協同学習の技法への関心が急速に高まってきた。他方、平成12-14年度科学研究費補助金基盤(c)「協同的な、学びづくりの指導力を定着させる授業診断指標の開発」(研究代表者：原田)の調査結果では、「グループ学習の必要感」は教職経験年数5年まで急激に落ち込み、その後は経験年数を重ねてもほとんど回復しないこと、即ち、余裕をもって学級経営に取り組める経験年数に達しても「グループ学習」への忌避感が現職教員に根強くあることの実態を明らかにした。協同学習の技法がもたらす効果に関してはこれまで数多くの関連研究がなされてきた一方、そのほとんどがグループ・ワークや話し合い活動の効果、それらと指導方法とのかかわりを対象としていた。そこで本研究では、社会コンピテンシーを育成する協同学習の学力形成効果に着目し、教師の自己診断結果を確かな指導力向上に結びつけることのできる授業診断シートの開発の着想に至った。

### 2. 研究の目的

(1)教師は安定的に学級経営ができるようになる経験年数に達しても、グループ学習を積極的に用いて学習効果を高めようとはしないという課題をかかえている。グループ学習の必要感」は教職経験年数5年まで急激に落ち込み、その後はほとんど回復しないという教師の意識の推移を基に、教師の学習指導力の客観的判定と自己課題の抽出、力量に応じた改善に有効に働く、授業診断・自己評価シートの開発を目的とした。

(2)これまでの研究では、協同学習の技法習熟段階に対応させて一連の技法の可視化を図り、指導力向上にはそれぞれのキー・ステージでどのような技法の習得を必要とするかが明示されてきた。グループ学習に対する教師の疑念を除くにはそれだけでは不十分であることから、指導の手ごたえを掴むことのできる客観的なデータ(エビデンス)が得られる授業診断指標に基づき、その診断結果と社会コンピテンシー習得との関連性の追求を目指した。

### 3. 研究の方法

グループ学習の定着には、学習者に社会コンピテンシーを習得させる指導法を特定し、教師が技法の習熟段階を自己評価し改善の手立てを得る必要がある。そこで本研究では、汎用的能力を育成する学力観・学力モデルを明らかにし、その学力観・学力モデルに基づき、グループ学習を通して育成しようとする社会コンピテンシーの学力要素や到達水準を抽出し、ドイツを中心とした実証的研究から社会コンピテンシーの育成に有効な指導法を抽出・検討し、グループ学習の指

導力を客観的に判定できる授業診断・自己評価シートとその活用法を開発し、自己評価・自己改善システム構築に向けた今後の展望を考察するという研究方法を採ることとした。

### 4. 研究成果

(1)本研究における「学力として社会コンピテンシーを育成するための授業診断シート」を開発するにあたり、学力モデルとして汎用的能力を育成するコンピテンシー要素構成モデルを特定した。これが第一の成果である。このモデルは、一面的な能力やある細目能力要素の単純化された訓練による習得を巧みに回避するために、「能力・知識・理解・技能・行為・経験・動機づけなどの多様な構成要素が網状に共振するファセット」=問題解決を目指して各能力要素が結集的かつ輻輳的に作用する機能型能力群として設計されたモデルであると定義することができる。このモデルは、些末なスキル習得型学習を回避し、それに歯止めをかけ、各能力要素を有用で活用的に作用させる学習像を提供してくれる。ファセットとして「複合的な場面やさまざまな問題状況の中で、既習得の知識・技能、経験知、社会的協同行為やモチベーションなどを、適宜、動員したり組み合わせたりして活用する能力」として、本研究の「社会コンピテンシー」を位置づけることができる。他の汎用的能力の要素育成にも一般化できるモデルといえよう。

(2)社会コンピテンシーを汎用的能力のファセット機能として特性を定めた上で、その社会コンピテンシーの要素の抽出・類型化を試みた。(1)のコンピテンシー構成要素モデルの一翼に社会コンピテンシーを組み入れ、他と複合的に機能する能力要素という視点から、社会コンピテンシーの能力要素の類型化を図った。この細目要素の具体化とカテゴリー化により、授業診断のための着眼点を特定することができた。これが第二の成果である。上記「社会コンピテンシー」にかかわる研究を進めるにあたり、欧州議会がEU各国共通のレファレンスの枠組として採択された勧告「生涯学習における8つのキー・コンピテンシー」(2006年12月)、「欧州における生涯学習のための資格認定の枠組み(EQF)」(2008年4月)、「同資格認定の枠組みドイツ版」、また、ドイツユネスコ委員会と各州文部大臣常設会議の勧告「学校における持続可能な発展のための教育」(2007年6月)、国連欧州経済委員会承認「未来のための学習：持続可能な発展のための教育におけるコンピテンシー」(通称：「教育者のためのESDコンピテンシー」)など、将来の世界的な学力政策の試金石として有力だと判断される政策的文書に基づき、本研究でターゲットとする「社会コンピテンシー」の世界的動向を把握したことも本研究の副次的な成果として挙げるこ

とができる。

(3)本研究では、社会コンピテンシーを育成する有力な授業方法として協同学習法を想定している。協同学習法による学習者への働きかけがもたらす作用効果については、ジョンソン兄弟やスレヴィン等々、実に膨大な実証的先行研究により裏づけられているところでもあるが、近年、有力な研究成果に恵まれていなかったことも事実である。

この問題意識から、メルボルン大学の教育学者ジョン・ハッティ (John Hattie)教授のメタ・メタ分析の手法を駆使した「学習の可視化」研究に着眼した。メタ分析とは、実証的先行研究が提供するデータの統合を図る研究である。ハッティは、このデータ統合したメタ分析研究そのものも既に蓄積されていることから、このメタ分析研究が提供するデータをさらに統合する研究を行なった研究者であり、英国の教育専門誌「The Times Educational Supplement」は、「世界に最も影響を及ぼす教育学者」と報じた。このハッティ研究に基づき、協同学習法の指導効果に関しメタ・メタ分析が導きだした結果の詳細を突き止めたことが、第三の成果である。この結果の分析により、本研究が前提として想定していた協同学習法による社会コンピテンシーの育成の根拠を補強することができた。エビデンス・ベースの教育学として国際的に認知されつつあるハッティ研究に対し、ドイツやスイスで活躍する第一線の教授学者と共同で成果発表できたこと、先行研究不在のわが国で先鞭をつけたことも成果として報告しておきたい。

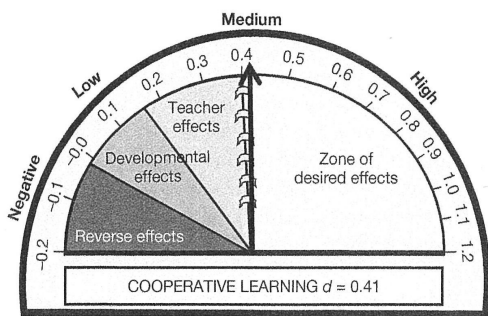


図1 協同学習の効果 (Hattie 2009)

(4)グループ学習の過程には多様な集団事態が発生する。グループ形態の形式的適用により負の事態が生じる場合には、適切な対処方法が特に求められる。この対処方法は、教師側の指導方法に限られず、子どもの側の主体的・自覚的な方法の習得と価値の内化という側面をもつ。教師と生徒の相互作用によりすぐれた授業が進行することは経験上把握できたとしても可視化が困難な力量ゾーンであった。まず、研究対象にしたグループ活動中の「教師の介入行為」に関し、教師の侵略

的な介入と対応的な介入に分け、介入行為の質を規定する要因と傾向の把握に努めた。この教師の介入行為の質に対し、エアランゲン・ニュルンベルク大学の研究プロジェクトが開発した5段階尺度による質評価を参照し、授業研究の対象として「教師の介入行為」を教授対象化し、その可視化を企図した。これにより教師の介入とグループ活動の最適状況との連関的關係を特定することができた。授業観察とは、授業の改善を目的に教師の指導力の向上に資する観察を指すが、教師の「定型的な手続き」の良否とともに、その手続きの背後にある当該教師の授業観や子ども観を検討の対象から除外することなく、教授行為としての手続きの意味や根拠にまで掘り下げて観察するという、奥深い授業観察を実行するための基本的視座を得ることができた。

(5)協同の精神の実現状況を評価・可視化するための授業観察の視点を定め、以下の授業診断シートを提供することができた。その主なものは、話し合いのルールに関する観察評価シート、グループ討議観察シート、および話し合い活動のコンピテンシー・チェックリスト、教師の指導法を分析するためのシート、効果的なグループ活動を組織するための要因チェックシート、グループの凝集性・機能評価シート、グループの成員間で行われる相互交渉の質評価チェックリスト、である。協同学習の質評価のための授業診断シートの試行的類例を構築できたことが第五の成果である。

協同学習では学習目標を仲間と共有して達成するために、ペアもしくは小グループの活動が組み込まれる。複数で共に学ぶことにより、一人ひとりの学習効果を相乗的に高めることができる。「学び合う」、「高め合う」、「助け合う」など、「合う」の言葉を付して表現される互恵的な協力関係に集団の成員が気づき、その価値をいかに内化していくことができるかが、グループ学習を真の協同学習にするための基本要件となる。観察評価の視点として、協同の精神といわれる高い志をいかに可視化できるか、そのチューニングはカンファレンス・セッションやモデレーションの機会を設けて精度を上げていくものである。

#### 引用文献

原田信之、ドイツの協同学習と汎用的能力の育成 持続可能性教育の基盤づくり、総頁数 248 頁、あいり出版、2016

Hattie, John, Visible Learning, A Synthesis of over 800 Meta-Analyses relating to Achievement. Routledge 2009. (原田信之、ヒルベルト・マイヤー (編著): ドイツ教授学へのメタ分析研究の受容 ジョン・ハッティ「可視化された学習」のインパクト、デザインエッグ社、2015)

原田信之、高旗浩志、中西良文、宇都宮明子、学力として社会コンピテンシーを育成する協同学習とその評価 授業診断シート開発基礎研究、総頁数 108 頁、冊子印刷工房、2016

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 15 件)

原田信之、グローバル時代における「生きる力」の探究 ドイツの学力改革の視点から、学校教育研究、第 28 号、日本学校教育学会、pp. 139-143、2013

原田信之：ドイツにおけるコンピテンシー構築志向型の学力形成 能力枠と非認知の学力要素、pp.271-282、日本学校教育学会「グローバル時代の学校教育」編集委員会(編): グローバル時代の学校教育、三恵社、2013

原田信之：ドイツ初等教育の統合教科「事実教授」の新しいスタンダード ~2013 年改訂学会版スタンダード~、人間文化研究、第 20 号、pp. 67-82、2014

[https://ncu.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=716&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=17](https://ncu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=716&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

三島知剛、高旗浩志他、全学教職課程の質保証に関する研究(2)、岡山大学教師教育センター紀要、第 4 巻、pp.82-89、2014  
<http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/a/52292>

櫻田健志、高旗浩志他、全学教職課程における「教職実践演習への取組」(2)、岡山大学教師教育センター紀要、第 4 巻、pp.123-132、2014  
<http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/a/52297>

中西良文、中島誠、他 6 名、協同学習場面における社会的動機づけ尺度作成の試み、三重大学教育学部紀要、第 65 巻、pp.347-353、2014  
<http://miuse.mie-u.ac.jp/handle/10076/13975>

高垣まゆみ、中西良文、田爪宏、協同学習におけるメタ認知を促す教授方略が他者との関わりの変化に及ぼす影響、三重大学教育学部紀要、第 65 巻、pp.283-290、2014  
<http://miuse.mie-u.ac.jp/handle/10076/13968>

エヴァルト・テルハルト著、原田信之(訳) ジョン・ハッティ(John Hattie)の「可視化された学習」への評価 ドイツの教授学研究に

おけるハッティの実証的研究の受容、人間文化研究、第 21 号、pp. 69-80、2014  
[https://ncu.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=890&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=17](https://ncu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=890&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

ヒルベルト・マイヤー著、宇都宮明子、原田信之(訳) 効果の高い学びを解釈するジョン・ハッティ(John Hattie)の実証的研究のデータ、人間文化研究、第 21 号、pp. 81-94、2014  
[https://ncu.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=891&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=17](https://ncu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=891&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

原田信之、協同の学びで育成するコンピテンシーと効果に関する研究 ~汎用的能力としての社会コンピテンシーの評価のために~、人間文化研究、第 22 号、pp. 107-125、2014  
[https://ncu.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=961&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=17](https://ncu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=961&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

三島知剛、櫻田健志、高旗浩志他、全学教職課程における「教職実践演習への取組」(3)、岡山大学教師教育センター紀要、第 5 巻、pp.19-25、2015  
<http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/a/53231>

中西良文、中島誠、他 5 名、大学初年次教育科目における社会的動機づけに関する検討、三重大学教育学部紀要、第 66 巻、pp.261-264、2015  
<http://miuse.mie-u.ac.jp/handle/10076/14454>

ヴォルフガング・バイヴル、クラウス・チーラー著、原田信之、宇都宮明子(訳) ジョン・ハッティ(John Hattie)の独訳版「可視化された学習」解題、人間文化研究、第 23 号、pp. 59-78、2015  
[https://ncu.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=1030&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=17](https://ncu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1030&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

原田信之：当事者性を視点にした理論と実践の融合の行方 教職大学院における授業開発実践の課題、学校教育研究、第 30 号、日本学校教育学会、pp. 127-131、2015

原田信之：ESD で育成する学力と総合的学習の学力、せいかつ&そうごう、第 23 号、日本生活科・総合的学習教育学会、pp. 34-41、2016 (査読有)

〔学会発表〕(計9件)

高旗浩志、藤原敬三他、初任期教員対象の授業力向上支援プログラムの研究開発、日本教師教育学会、佛教大学、2013年9月15日

高旗浩志、藤原敬三他、意識調査から見る初任期教員の現状と課題、日本教師教育学会、佛教大学、2013年9月16日

高旗浩志他、全学教職課程の履修指導におけるGPA活用の可能性、日本教育大学協会研究集会、札幌全日空ホテル、2013年10月5日

岩田睦巳、原田信之、パフォーマンス評価を組み入れた単元構成のストラテジー、日本教科教育学会第39回全国大会、岡山大学、2013年11月23日

薄田茂樹、原田信之、パフォーマンス評価を取り入れて思考力・判断力・表現力等の育成を図る音楽科の授業、日本教科教育学会第39回全国大会、岡山大学、2013年11月23日

高旗浩志、昼間定時制高校における「教師の協同」の実証的研究、日本協同教育学会第10回大会、2013年12月1日

西村まりな、中西良文、読解の理解深化を目指すLTD話し合い学習法の実践 読解力方略と動機づけに着目して一、日本協同教育学会第10回大会、札幌大学、2013年12月1日

中西良文、下村智子、他3名、プロジェクト活動を中心とした初年次教育科目受講による社会的動機づけの変化、大学教育研究フォーラム第20回大会、京都大学、2014年3月8日

原田信之、教職大学院における教育実践研究の現状と課題、(課題研究：教育研究と教育実践の融合はどこまで進んだのかー教職大学院における研究者の「当事者性」の地平と課題) 日本学校教育学会、仙台大学、2014年8月10日

〔図書〕(計5件)

山田美香、原田信之、上田敏丈、古賀弘之、ESDと次世代育成の教育論、総頁数93頁、担当：ESDと次世代に育成する学力 孤業型学力から社会参画型能力の形成へ (pp.16-35)、資料(pp.82-92)、2014

Harada, Nobuyuki: Lebenskundeunterricht als integrativ-anschlussfähiges Schulfach Japans, pp.289-293, Kahlert, Joachim / Fölling-Albers, Maria u.a. (Hrsg.): Handbuch Didaktik des

Sachunterrichts, Klinkhardt, 2015

原田信之、ヒルベルト・マイヤー(編著): ドイツ教授学へのメタ分析研究の受容 ジョン・ハッティ「可視化された学習」のインパクト、総頁数140頁、デザインエッグ社、2015

原田信之: ドイツの協同学習と汎用的能力の育成 持続可能性教育の基盤づくり、総頁数248頁、あいり出版、2016

原田信之、高旗浩志、中西良文、宇都宮明子、学力として社会コンピテンシーを育成する協同学習とその評価 授業診断シート開発基礎研究、総頁数108頁、冊子印刷工房、2016

〔その他〕

ホームページ等

研究代表者のホームページにて現地調査や研究成果の報告を公開している。

<http://www.geocities.jp/nrmkg400/cl.html>

上記ホームページでは、研究成果報告書『学力として社会コンピテンシーを育成する協同学習とその評価 授業診断シート開発基礎研究』を希望者に配布することを案内している。

#### 学力として社会コンピテンシーを育成する協同学習とその評価 授業診断シート開発基礎研究



グリーン研究所ホームページ

研究交流の紹介

<http://www.green-institut-rhein-ruhr.de/index.php/20-archiv>

新聞報道

西ドイツアルゲマイネ新聞(2014年3月7日付)に記事掲載

<http://www.derwesten.de/staedte/duisburg/sued/japaner-besuchen-gesamtschule-sued-in-grossenbaum-id9088511.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

原田 信之 (HARADA, Nobuyuki)  
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・  
教授  
研究者番号：20345771

### (2) 研究分担者

高旗 浩志 (TAKAHATA, Hiroshi)  
岡山大学・教師教育開発センター・教授  
研究者番号：20284135

中西 良文 (NAKANISHI, Yoshifumi)  
三重大学・教育学部・准教授  
研究者番号：70351228

宇都宮 明子 (UTSUNOMIYA, Akiko)  
佐賀大学・文化教育学部・准教授  
研究者番号：40611546  
(H.27年度)